

融合研設立5周年記念

融合フォーラム 2002 in 福岡

「さあ本番！学社融合の教育創造」

～子供がつなく学社融合～

教育課程による新しい教育の創造がスタートし、「総合的な学習の時間」や中学校における「選択教科幅の拡大」など、生涯学習社会の形成に向けて学びを広め、深める教育が推進されています。一方、その学びの成果は学校の中だけでなく、数多くの具合的な事例が「学社融合」の取り組みによって社会に還元されているという報告がされています。学社融合は、このように子供の教育に留まることなく社会にとってもメリットがある最先端の教育といえると思います。

そこで、融合研が西日本で開催する初のフォーラムである今回の福岡フォーラムでは、動きだした新教育課程の具体的な事例をもとに、学社融合の視点から教育創造に取り組んでおられる全国の皆様方と、学社融合についていっそう深めるために提言したり論じ合ったりする2日間にしたいと思います。学社融合に関心のある多くの皆様のご参加をお待ちしております。

学校と地域の融合教育研究会会長 宮崎 稔

C 分科会

環境学習とビオトープづくり

コーディネーター：

田中敏久会員（西東京市柳川小学校教員・全国学校ビオトープネットワーク理事）

環境街づくりとビオトープづくり。これを学社融合で地域の大人と子供と力を合わせて一緒に創っていくという形がだいぶ行われています。

人と生き物、自然がどう共生できる場をどう作っていくか？

《C分科会テーマ》

子供が創る } 地域の学び遊びと共生の場
子供と創る }

これから行ういくつかの事例発表を上記テーマをもとに考えていきましょう。

《実行方法》

模造紙を使用し、緑の紙と黄色の紙を使用し意見の交換を行う。また、皆さんい書いていただいた色紙は「YES：同意点」「?：疑問点・質問」「NO：反対意見」の個所に紙を貼っていただく。

《協議の視点》

- A) だれが・何を・どう創出できるのか?
- B) 学社融合はどこまで可能か
 - 子供の社会参画はどこまで可能か
- C) 学社融合の発想ならばどうクリヤーできるのか

< 発表事例 >

今野英山氏

株式会社竹中工務店 技術研究所・センター研究開発部エコ・エンジニアリンググループ

こんにちは

1996年、今から約6年前に、技術研究所に隣接している学校(千葉ニュータウン小学校)で、学校の中のビオトープを提案した。子供達と一緒に企画からはじめ、ビオトープづくりを実施した。

千葉ニュータウンは自然がない環境であった。

千葉ニュータウンにおける学校ビオトープづくりについて、まずは、場所を地図を用いて紹介です。

千葉ニュータウン中央が竹中工務店技術研究所のある場所だそうです。

周辺が田園地帯、里山の風景ではあるが、千葉ニュータウンの中央に研究所。そして、小倉台小学校ですが、生徒数が約950名ぐらいです。

全員が、高層住宅、つまり集合住宅に住んでいる。

周知のこととは思いますが、ビオトープとは「ある種の生物が生息できる十分な環境が整った空間」。

我々は、地域の自然ポテンシャルにあった計画技術を確立しよう。また、ビオトープの場合は、「できておしまい」というわけではなく、環境教育や魅力的なコミュニティ活動の場として住民参加も含めた維持管理プログラムまで踏み込んだ提案をした。

最初は研究所の中で実行しようとしていたが、地域の中で作ることにした。

校舎が「コ」の字型に囲まれて約1000m²の広さ。

子供達に回りの自然についてレクチャーをした上で、ビオトープを作るにあたりどんなものが欲しいのか?子供たちに絵を書いてもらった。

その中には、我々、大人達が発想できなかった島に対する橋など、子供らしい発想があり、それを反映させていこう。となった。

プランのあとの施工ですが、穴を掘ったり防水シートを敷いたり作業は業者がしたが、子供たちに参加してもらって池などを作っていた。工事に参加するだけでなく、理科の授業に活用してもらった。

田んぼのあぜの草がビオトープに重要な資源ですが、許可を得て植えた。

子供たちと一緒に、蛙やメダカなど、水の生物を周辺から持ってきて池の完成。

予算も限られていたので、樹木に関しては町のほうから負担していただいた。

完成後は、生物観察や田植えや稲刈りなども行った。

竹中工務店技術研究所がフォローとして植物分布図など提供し、植物の増減等分かるようにしている。

年毎に表であらわして植物の分布図に限らず植物の有無リストの作成。

ここからビデオの内容。(約8分)

これから作るビオトープが自分たちの自然であることを意識してもらうために計画段階から子供達に参加してもらった。まず、子供達に地域環境の特徴をスライドなどを使ってレクチャーし、イメージしてもらい、地域にあった環境を小学校の子供達に絵で表してもらった。水田や雑木林など・・・。

また、作ることへの参加。これにより、より強くビオトープへの意識がもたれた。

作った後のビオトープの育み。

夏の初めに2年生による田植え。秋の収穫への期待

子供達によってイグサなどいろんな草木、メダカなどの小動物、これらを外からビオトープへ取り込みました。

自然との楽しいふれあいの場としてビオトープづくり。ビオトープづくりとをしておして、そして、自然を通してたくさん学んだものがある。

直接水を触ったり泥を触ったり、また、理科でトンボの孵化の瞬間などを見たり・・・

いろんな生き物が自然に存在するんだということを学んだ。

自らの手で築き、育てたビオトープだからこそ自然を大切にしようという意識が生まれた。住民の参加が必要なポイントだった。

ニュータウンは自然とは無縁の世界であった。周辺には多様な生物が存在するのに、なぜ、ニュータウンにはそれらが存在しないのか、自然が破壊された世界に住んでいることの認識は子供達にはあるのか？が大事ではないのでしょうか。それは、最初のレクチャーで行われたのでしょうか。

たぶん、子供達は感じ取ってくれたと思う。

竹中工務店技術研究所を中心に設計した、その理由は、学校や地域からの提案ではなく竹中工務店技術研究所からの提案だったことです。途中参加の人や役所の意識が弱いことに関して疑問が残っている。担当役所の人々の異動で参加が少なくなったことへの不満。

池の水は？・・・屋根の水を中水利用しています。

< 発表事例 >

榎重善

千葉県習志野市秋津コミュニティ運営委員・横浜市役所

大人のサークルで工作クラブをやっている。

発表趣旨は、秋津小学校での自然観察園づくりの取り組みについてです。

榎さんは横浜で公園を作る仕事をしている。地域から学校へ意見要請した。学校に声を出してもらいながら企画を教頭先生に出してこういう風に作ったらどうかを子供の意見を交えながらつくっていった。計画段階から子ども達に参加してもらった。

はじめからビオトープづくりが目的だったわけではなかった。自分の子どもが幼稚園のときは、手作りで遊具づくりを行った。そこで、物を作る楽しみ、達成感を大人も子どもも味わえた。もっと、子供の遊びの要素を豊かにできないか。が発端。

子供が喜ぶ。親も喜ぶ。学校先生も喜ぶ。その延長線で学校の中での田んぼ作りを中心にビオトープづくりがなされた。

ビオトープに関して、本来の本当の自然ではないではないか！ と、いう反対意見もあった。それでも、埋立地で回りに自然がなかった環境においては、

「小学校の屋外環境学習とビオトープづくり＝一番身近」

つまり、身近な場所に手作りの自然を置きたかった。

土曜日の午前中2時間で、ただで集めてきたタイヤでピラミッドを作った。

午後までかかる場合は、お昼ご飯をお母さんたちが準備して地域一丸となって作って行った。

ほかにも、シーソーなどいろんな子どもの遊具を作った。

子供が通園しているなかなかので、お父さんたちが作っているので子供たちが興味津々にしていた。

千葉県習志野市秋津コミュニティ運営委員＝お父さんたちでいっぱい。

一度、池を作ったが泥で埋まってしまった例がある。

作業そのものは7ヶ月くらいです。地域のお大人たちは、学校が発信する情報をもとに集まり、活動しました。差生涯学習に大きく穴を掘りましたが、一部は土木会社に安い費用でお願いしているところもあります。

土曜日の午後は、午前中に大人たちがやっていたことを子供たちが真似見て穴掘っている風景もありました。

大きい防水のシートを池に入れるのが難しかったが一番印象に残っている。

本日のメニューを貼り出して呼びかけをしました。

水路については、子供達が自由に水路を変えることができるように、わざと大きく作りました。子どもを中心とした作業です。

6年生が卒業しても一緒に活動している。

完成した年に田植えをしました。

幅の広いあぜは車椅子がとおれるように配慮したが、まだでこぼこでとおった実績はない。埋立地でもともと海の地なので、井戸を掘ったが海水だった。100mくらい掘らないと水が出ないらしい。今年も3回目の稲づくりがうまくいっています。

千葉大学大学院の田中宏美さん

秋津小学校のビオトープづくりは、子供の環境学習の場として活用。

作る活動と育む活動を考えた。

ビオトープのイメージづくりをしたあと、具体的な作業への参加をうながした。

その際に、子供たちがイメージづくりをした。

育む活動が田植えなど。

イメージづくりは子供たちの意見重視した。子供達の絵を通して感じたのが、水と生き物が多く、具体的だった。

子供の具体的な作業への参加がよかった。

土堀・運ぶ 学校にかかわる先生・親・子のかかわりができた。

専門家と子供の実行委員会との話しあいで杭づくりをした。

シートの杭の差込みも子供と一緒にこなった。

育む活動を通して、子どもと住民とのかかわりや自然遊びが増えた。学習への活用ができた。

地域住民と子供のかかわりが生まれた主な活動をいくつかあげると、

2000.5 たんぼ作り

2000.6 完成式

2000.7 防災キャンプ

2000.8 上総堀り（かずさぼり）井戸掘り作成（夏の思い出：子供参加）

などがある。

見守り 伝承 友に楽しむ 語り合う 場ができた。

大人は子供に伝えたいことを伝える場ができた。

生き物で遊ぶ 面白い形の石 井戸の水をくみ上げて楽しむ など、ビオトープがなければ体験できなかった遊びがある。

学習への利用もできる。

たんぼづくり 総合的な学習 写生会 花壇づくり など、遊びと授業が一体化している。

6年生の先生が、ビオトープが荒れているのをみて先生が総合的な学習の時間としてビオトープの環境計画を考えることを行った。

「花壇を大切に」の看板を作り環境学習とビオトープづくりを実践した。

学校環境学習とビオトープづくりの管理にかかわる。（委員会の活動）

意見を出し合う 環境の状態を調べる ごみを拾う 新しい環境学習 などビオトープづくりを通して、意見を提案するようになった。

（まとめ）

こどもの「つくる」プロセスへの参加が、
 { 学校、地域、子供の共同活動になった
 { 子供が参加した環境作りになった

ビオトープによって変わったこと、発見したこと。

こんな驚きもありました。水が冷たいことを知らない子供がいた。

ある意味驚きだが《体験ができる場》ができた

また、「学校全体が明るくなったと思う」という意見や、「参加者の気持ちが変わってきたと思う」という意見があった。鳥がやってきたことにたいする子供の驚き。もあった。

また、活動をしながらか子供たちの気持ちの変化があった。

例えば、落ちていたごみを今まではそのままにしていた子供も、オトープづくりを通して環境を考えるようになり、ゴミが落ちていたら、「どうしようか?」と考えるようになった。

・「つくる」「はぐくむ」という切り口が面白い

いい面だけではなかった。もっと子供が環境管理に参加したほうがよかった。また、環境作りから発展して、学校が地域に何を発信できるか更に一歩先を見据えてほしかったという希望がある。

<発表事例>

漁師政子

高知子供の遊びを考える会

平成12年高知県香味郡土佐山田町の町立入船小学校の安岡校長と地域教育指導主事の矢田さんと、学校の中だけではなく先生も生徒も地域へ目を向け活動できる場所作りを目標に「地域の中に学びの拠点」をつくろうと活動してきた。

作った場所は校庭の中ではなく、外に作りました。その理由は、学校ではなく、地域へ出ることににより、地域の中に子供のために遊び場を作りたい。ということです。

おう！ ぬうお～！ ハブニング！！！！

・・・なんと、写真が目いっぱいはいったパワーポイント！ ずばり180MG

私のパソコンをお貸しし、しばし入力中断。悲しか～。

ビオトープをはじめる前にビオトープについてのレクチャーを行った。

まず、一番身近にある公園を題材にしながら、ビオトープと普通の公園との違いを説明した。

その中で、私たちと子供達の間で決めた約束があり、

自分達の手でビオトープづくりをすること。（大人はお手伝いしかないよ）

土佐山田の環境にあったビオトープをつくること。

完成したら皆で竹飯を食べよう。

平成13年度に候補地が決定し、本格的な活動の時期に入りました。4年生を対象として30名、ピオトープとはどんなものなのか。ワークショップを行いました。また、話し合いをしながら作る楽しさを学んでいきました。作業は、草刈・整備など分担しました。平成13年に池が完成する予定だったのですが、子供達との話し合いを重視したかったので、平成14年までかかりました。かぼちゃ等も植えました。鏡野中学校の生徒や地域の人も草刈を手伝ってくれました。大人も手伝いながら防水シートを敷いたり、水を入れたりして夏に池が完成しました。ここを「地域と学校の遊び場の拠点」という意味で作りました。

< 発表事例 >

栄永徳博

熊本県水俣市役所環境対策課課長

地域作りやPTA活動をしている。水俣市は水俣病の教訓から、現在、環境モデル都市を目指しています。市民が取り組むゴミ23分別収集、ゴミ減量女性連絡会議、全国6番目にISO14001を役所が取得などの環境政策に取り組んでいます。特に、水俣市役所がISOを取得したのをきっかけに、水俣市独自の学校版ISOを展開した。現在各学校で学校版ISOを取得している。

ピオトープではありませんが、学社融合という視点からISOを絡めて話をしていきます。

水俣市は水俣病環境破壊と偏見差別で地域が破壊されていった。

そこで、マイナスの遺産をプラスの遺産に変えようではないか！また、二度と水俣病のような問題を起こすまい！という気持ちで環境・健康・福祉を大切にする町づくりに取り組みました。

目標は環境モデル都市にすることです。

ゴミの23分別など市民が、住民が、自ら手を汚して環境活動に参加していきました。

そこでオリジナルの環境ISOを作っていました。

家庭版ISO、学校版ISO、幼稚園版ISO、保育園版ISO、地区版ISOなどがあります。

学校版ISOで例をあげれば、学校給食の残飯についても堆肥として利用する。などです。水俣市役所のISO14001を取得するのあたって、コンサルタントに頼ることなく、自分たちでマニュアルをつくり取得しました。これをベースに学校版ISOをつくりました。

簡単なことから無理なく長続きできるようにやっていきましょう。という方法で取り組みました。

月1回市民の取り組みとしてゴミ収集作業があるが、学校によっては、この日は部活動をやめて、地域のごみ分別作業を手伝うところもあります。まさに、地域と学校が一体化した様子をあらわしています。学校の中でも環境教育の推進の場ができてきた。

子供がつなぐ学社融合故郷を大切にする。

ごみ端会議 = 地域参加・・・新しいことば

・・・コミュニケーションツールになった。


子供の地域活動への参加により存在感が地域の中で認められるといった面もある。

自分たちの郷土を大事にする気持ち = 究極の目的

問題点

内容のベルアップ

P D C A とは、 プラン PLAN ドゥ DO チェック CHECK アクション ACTION



計画して実行して評価して次の改善を行う

(ポイント)

水俣病という負の遺産を逆手に取った環境へのとりくみ

取り組みの中で発生した住民の意識変化

環境社会への子供達の参加

(質問) 実際にビオトープを作ってみての疑問。

自然を破壊してもビオトープで復元ができればいいではないか? という概念が、子供たちが感じ取っていないかが気になる。また、ビオトープを作る際に、自然破壊をしてはいけないことへの警鐘はしたのか?